



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 299 号)

「覚馬とゆく」(4)

— 太平澆季の風習を脱するには —

おおしま ちゆうせい
大島 中正氏(同志社女子大学表象文化学部教授)



・ 太平澆(たいへいぎょう)季(き)

山本覚馬は、自分が生まれそだった時代をどうみていたのでしょうか。『管見』に「変制(制度の改革)」という項目があります。その項目は「皇国の大本、御建て直しに付きては、太平澆季の風習を脱し一新不易の制度御変革なるべし」という一文ではじまります。「澆」は「軽薄」、「季」は「末」。「太平澆季」とは「平和であるがゆえに軽佻浮薄な末の世」という意味になりましょう。末世の日本を改革しなければならないと覚馬はおもっていたのです。

しかし、改革には時間がかかる。「変制」には「法律を改める場合も、たとえば年齢に応じて人に教えるように、国の文明開化の進む遅速もあるから、世の動向に配慮して変革の緩急を考えるのがよい。変革は一か月かかる場合もあれば、三か月で改まることもあるだろう。また因習に染まってなかなか改革が難しいこともある。しかし、やがては制度も定着し、文明の政治も全国に行きわたるはずである。」とあります。

覚馬は、人の情というものを考慮しなければ、いかに合理的な風習や制度であってもその実現は困難であるとおもっていたのでしょうか。

・ 髪結床の廃止

覚馬は、髪結床の廃止を提唱しています。髪結床で結髪することは、無駄無益だというのがその理由です。現代語訳によって紹介します。

現在、京都・大坂・江戸の三都には約 2 万 5 千人の髪結職人がいる。髪結床は混みあっているのです、ある時は 1 時間、またある時は 2 時間費やすことになる。遊び人が集まって博奕をしたり酒と女の話ばかりして、若者たちを墮落させる。人が時間を無駄に過ごすだけでなく、大いに風紀を乱す場となっている。

そればかりでなく、日本の人口を 5 千万人とすれば、一家に 5 人として世帯が 1 千あることになり、1 つの世帯が 1 年に使う剃刀・油・元結にかかる費用が金二分ずつとみて 5 百万金になる。人口 5 千万で、髪結床で過ごす無駄な時間を仕事にあてれば、およそ 5 百万金の稼ぎになるだろう。(中略)

そして、その廃止には時間がかかる、いや、時間をかけようといっています。しかしながら、一度に風変えるのは人の気持ちを理解していないことになるだろう。だから、10 歳以下の者は王朝風の髪型にもどし、そのほかの者は、それぞれに任せるのがよい。髪結い見習いになったり、油や元結の製造者になることも 10 歳未満の者には禁止すべきである。そのようにすれば 20 年も経たないうちに次第に王朝風の髪型に戻るだろう。

覚馬は、いわゆる「ザンギリアタマ (斬髪)」ではなく「王朝風」の復活を提唱しています。後に覚馬自身の頭髪も「ザンギリアタマ」になるのですが、覚馬は心中どうおもっていたのでしょうか。「これはいい。合理的である。貴重な資源、貴重な時間の節約にもなり、風紀の粛清にもつながる」とおもったのではないかと想像します。さらに現代のように予約というシステムによって時間が節約できることをすれば、覚馬は笑みをうかべることでしょう。

余談をひとつ。1958 (昭和 33) 年生まれのわたくしは、理髪店での 2 時間以上の待ち時間がとてもたのしみでした。わたくしがかよっていた店には、「大人の雑誌」がたくさんありました。家や学校ではよめない、店頭で立ち読みするにははずかしい。そんな雑誌がよめる理髪店でしたので、中高生の時代は床屋通いは貴重な「娯楽時間」でした。同志社ファンの男性のみなさまはいかがでしたでしょうか。

・同志社 300 年

『管見』を翻刻・翻訳していて印象的であったことはなにか。そう問われたならば、わたくしは、まよわず「それは数字であります」と答えます。人間の平等と個の尊重とがつかぬかされている、種々の提言の内容もさることながら、具体的に数字を提示して、自身の主張を説得力あるものにする。そんな手法がきわめて印象的です。今回とりあげました「髪制（男の頭髪）」でも数字がしめされています。覚馬が、適宜に数値データを明示しておのが主張を展開するという手法をいつ、どこで身につけたものか。わたくしには、たいへん興味深い問題であるとおもわれます。しかし、残念ながら、今は答えることができません。同志社ファンの皆様からご教示いただけましたら、ありがたく存じます。

ところで、新島襄は、勝海舟からの問いに対して「同志社の完成には 300 年」を要す旨の回答をしたとい伝説があります。その伝説にしたがえば、同志社は 2025 年によく折り返し点をむかえるということになります。

同志社の完成には何年を要すか。覚馬ならどう回答を提示したでしょうか。そのようなことは数字ではしめせないと回答したかもしれません。あるいは、500 年スパンで世の改革をかんがえていた勝海舟の影響もあって、500 年から逆算するような回答をしたかもしれません。残念ながら覚馬の回答は不明ですが、心中の試算はあったかもしれないと、わたくしは想像しています。

なお、本井康博先生の『同志社を掘る—創立 150 年に向けて—』には「創立秘話」と題する章に「同志社の完成は二百年か—海舟・新島座談の謎を解く—」という論考が掲載されています。ご一読をおすすめします。■